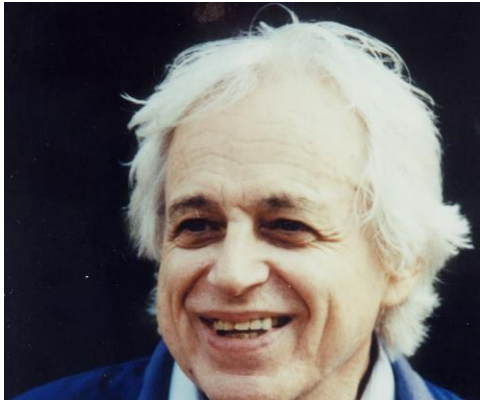
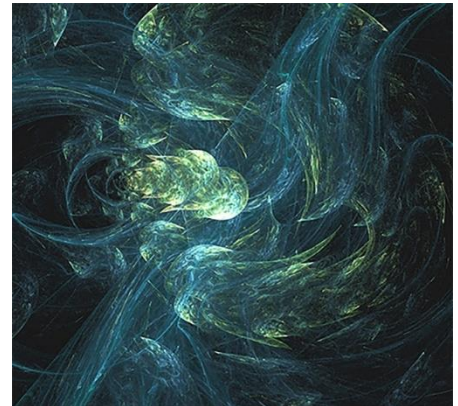


<ジェルジ・リゲティ生誕 100 年！新たな創造の可能性を追求し続けた作曲家>



2023 年、生誕 100 年のアニバーサリーイヤーを迎えるジェルジ・リゲティ（1923-2006）はハンガリー系オーストリア人の現代音楽作曲家です。彼の音楽は、映画「2001 年宇宙の旅」、「シャイニング」、「アイズ・ワイド・シャット」などでも使用され、クラシック音楽を越えて広く知られています。実験的な作品を多く残しており、生涯にわたって作曲技法や様式を越えた、新たな創造の可能性を追求し続けました。その原動力となったのは、ユダヤ系ハンガリー人だったリゲティの家族は、その多くがナチスの犠牲となっており、リゲティ自身も何度も死に直面したことによる大きな心の傷と、厳しい社会情勢の中で持ち続けた批判精神でした。

1956 年、ハンガリー動乱のためオーストリアへ亡命すると、同時代の前衛音楽に触れ、独自の語法と作風を創造し始めます。1959 年の『アパリシオン』や、1961 年の『アトモスフェール』に取り入れられた「トーン・クラスター（密集音の語法）」は、ヨーロッパ音楽界に衝撃を与え、現代音楽史に残る作品となりました。1980 年代に入ると、作風はますます多様になっていきます。故国ハンガリーへの思いから、民族性の色濃い作品を生み出す一方で、アフリカ音楽などヨーロッパ以外の音楽に関心を高め、フラクタル（全体と部分が相互に挿入される自己相似性に関する数学）の考え方を創作に取り入れるなどして、ポリリズム（多次元リズム）や、オートマティズム（自律運動性）などの独特な語法を生み出していきます。



そのような充実していた時期に作曲されたのが「ピアノのためのエチュード第 1 集」（1985～2001 年に完成）であり、作曲技法の新境地を確立しました。18 曲からなるピアノのための練習曲。ショパン、リスト、ドビュッシー、スクリャービンらの練習曲の系譜に連なる、20 世紀で最も重要なピアノの練習曲のひとつとされています。18 曲の練習曲は 3 つの巻（*Livres*）に分かれていて、第 1 巻には 6 曲（1985 年）、第 2 巻には 8 曲（1988 年-1994 年）、第 3 巻には 4 曲（1995 年-2001 年）が収められていました。各曲の表題は詩的な表現を織り交ぜたものとなっており、ピアノの音色表現の可能性を徹底的に探究している。今回演奏する第 11 曲『不安定なままに（*En Suspens*）』は、右手と左手に付された調号が異なり、右手は 1 小節に 6 拍、左手は 4 拍で奏するという複雑なリズム、両手の不規則なフレーズの長さやアクセントなど、幾何学模様を思わせるような独特の音世界が構築されています。